

50 大腿骨遠位端骨折に対する Zickel supracondylar nails の使用経験

(霞ヶ浦・整形外科)

○小野彰夫 市丸勝二 井上全夫
高山俊明 佐野圭二 三松興道
古家信一 柳橋俊秀

大腿骨遠位部骨折に対し Zickel supracondylar nails を使用した3例を経験したので報告した。

＜症例＞ 症例1. 42才女性、交通事故にて受傷。角南の分類でⅡA型の開放性骨折を認めた。症例2. 61才女性、転倒にて受傷。ⅡB型の開放性骨折を認めた。症例3. 22才男性、交通事故にて受傷。ⅣB型の閉鎖性骨折を認めた。術後成績を荷重開始時期、膝関節可動域、及び、Neer判定基準変法による治療成績評価で比較すると、荷重開始時期は症例3が11週と最も遅く、その他は8週～9週であった。膝関節可動域も症例3が最も悪く0°～95°、症例1では0°～100°であり、後療法が最も早く行うことができた症例2では0°～135°と良好であった。治療成績評価ではそれぞれ76点、96点、82点と良好であった。

＜考察＞ 大腿骨遠位部は解剖学的特徴に、骨皮質が薄く、骨髓腔が粗な海綿骨により形成されており、髓腔が末梢に行くにつれて広がっていくなどの特徴があり、観血的治療を行うには不都合な部位であった。それ故、従来は保存的治療の方が優れているという報告もあったが、近年、内固定材料の進歩に伴い、観血的治療の優秀性を示唆する報告が多くなってきている。その内固定材料には種々あるが、その中で Zickel 釘は、適応を選べば、手術侵襲が少なく、手術手技も容易で、骨折部を閉鎖的に処置する事も可能であり、釘の挿入過程で骨折部が整復され、かつ、適度な固定力と釘に適度な弾性があるなどの利点がある。しかし、釘の長さが一種類しかない為、高位の骨折には固定力が弱く、釘に前弯がついていない為、骨折部で後方凸変形を起こす事があるなどの欠点もある。又、骨粗鬆症例にも使用できるなどの特徴もあり、術後成績も優れており、有用な方法であると思われる。

51 腰部脊柱管狭窄症の保存療法とその限界

(整形外科)

阪口 哲朗 大川 徹 勝田 真史
武井 良憲 駒形 正志 今給黎篤弘
三浦 幸雄

【目的】腰部脊柱管狭窄症に対する治療法としては、まず保存療法が試みられ、症状改善のみられない例が手術の対象となることが多い。今回我々は腰部脊柱管狭窄症に対する保存療法の治療効果及びその限界について、flexion brace療法を中心に検討した。

【対象】昭和63年から平成4年4月までの間に馬尾神経性間歇性跛行を呈し、当科にて保存療法を行った腰部脊柱管狭窄症104例で、男性66例、女性38例、平均年齢66.1歳である。治療法および症例数は、flexion brace療法73例、軟性コルセット療法15例、理学療法9例、プロスタグランディンE1静注療法7例であり、国際分類に準じた分類では、spondylotic43例、spondylo-listhetic35例、lytic-listhetic7例、combined17例、post operative2例であった。

【結果】flexion brace療法群が、日整会スコア、間歇性跛行の改善率において他の治療群より優れていた。flexion brace療法群における有効率は51%、改善率は平均27.3%で、間歇性跛行は治療前平均450メートルが治療後平均1400メートルに改善した。flexion brace療法有効群の中でも、他覚所見陰性例、罹病期間1年未満の症例の改善率が優れていた。装具装着から治療効果発現までの期間は1週間から7か月までで、約65%の症例が装具装着から1か月未満で症状の改善を認めた。flexion brace装着にて症状の悪化を認めたものは1例のみであった。

【結語】以上よりflexion brace療法は腰部脊柱管狭窄症に対する保存療法のうち最も有効な治療法であると思われるが、治療開始後7か月以上症状改善をみとめないものは本療法の限界と考え、手術療法を考慮する必要があると思われる。